

平成 29 年 12 月 22 日(金)

読売新聞に記事が掲載されました

角膜移植 支える人々

小沢眼科内科病院(水戸市)の眼科医、木住野源一郎さん(33)は今年夏の初め、病院からタクシーに乗り、ある一軒家に駆けつけた。患者への角膜移植に不可欠な眼球提供者が現れたのだ。この献眼者は生前、移植を待つ患者にあっせんする公的機関「アイバンク」に献眼登録をしていた。

木住野さんは、遺族に一礼し、布団に寝かされた遺体と

記者ノート 2017

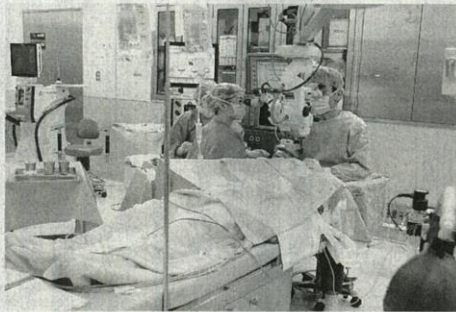
向き合った。眼球を摘出し、義眼を入れると、まぶたを4針ほど丁寧に縫い合わせた。「不自然な状態のままにして遺族にづらい思いをさせたくない」。木住野さんは、そう話した。

角膜移植は、死後12時間以内の眼球摘出が望ましいとされる。担当医は、県アイバンクから連絡を受けると、遺体のある場所に急行。筑波大附属病院では、アイバンク当番の眼科医が自宅などで待機し、一報を受け次第、出勤する。

県アイバンクも24時間の対応だ。2人の職員が1か月ごとに交代で専用の携帯電話を持ち歩く。天野ミサ子さん(63)は自宅で就寝する際も枕元に置き、深夜でも電話が鳴ればその場で遺族や病院の話聞き取り、眼科医の待つ医療機関に連絡する。緊張の連続だが、「その電話で視力が回復する人がいる」とやりがいを感じている。

県内のアイバンク新規登録者が2016年度1444人で全国最多と茨城版の記事で紹介したのは今年6月。同年度の献眼者は27人だった。筑波大医学医療系眼科の大鹿哲郎教授は「アイバンクの運営に関わるライオンズクラブの啓発やアイバンクと眼科医の対応などがうまくいった」と語る。

茨城は、居住可能な「可住地」面積が47都道府県のうち4番目に大きく、眼科医とアイバンク職員は広いエリアで奮闘する。移植を待つ患者に、角膜という「希望」を届けるために。(児玉森生)



摘出された角膜は手術で患者に移植(7日、小沢眼科内科病院で)